

開業醫（賞）

服部 水仙子

「貴君、車がまゐりましたよ」

音聞きつけて細君は云ふ。がら／＼と曳き入れた車は玄關の前に止つた。

薄暗い部屋に、暫らくは音もたてず、丁寧に、洋服を着替へて居た菊井は、やがて壁にかけた、鏡の前に立つて、襟飾を直し、髪にはも一度櫛の齒を入れて部屋を出た。

細君は絹切れで、せつせと長火鉢の縁を拭いて居た。塵の中に、畳み込んで拭き、廣げてはまた畳んで拭く手許を見ながら、其處にあつた赤羅宇の煙管をひきよせて一吹つける。そこへ薬局に居た義弟の太一がはいって來て。

「あの、仲町の本曾谷から直ぐ來てくれつて來ました」
「ふむ」

疾くに承知とも聞えるやうな返事して、また一吹つけたが、それはすつぱ／＼と飲んでしまつて立ち上つた。手下げは玄關に出てあつた。犬にかまつて居た車

夫は氣はひに飛んで來て膝掛けを肩にかける。門の前には男の子守が、體を左右にふり乍ら、唄を小聲に眺めて居る。筋向ひの宿屋の二階には、肩當ての極く目にたつ寢巻を着た客が、欄干に手をついて瞰下して居る。

通りがけの病家も一軒、愛想宜く切り揚げて、車は又年暮に忙しい街を走つて居る。電柱に張りつけた賣り出し廣告、赤い圈點も景氣宜く、諸々な出店出店の賑かさ。車夫の呼聲に、慌てゝ飛び退く人々の顔を頓馬とも言ひたげに、菊井らは即ち傲然と構へて居た。

車の歩みが緩くなつた。ふと氣が付くと本曾谷の店先には、美しい、車が一輛止つて居る。

不安の念は、車の背に、小さな三つ柏葉の紋を認めるや否や、激しく胸を打つた。

火鉢を挟んで其處に居た二人の車夫は、梶を下す車夫に笑顔で會釋して、目をそばたてゝ眺めて居る。

悪るびれずに宣告を聞きに往くと云つたやうな心でずつと奥に通ると、そゝくさ出向へた主人が

「お待ち申して居りやした」
と先に立つ。

「やあ」

聲は先ず座つて居た人から掛つた。

「お待せ申しましたさうで……失禮しました。」

「いえ、ああ、如何です、お忙しいですか」

「え、なあに、はゝゝ」

菊井は苦笑せざるを得なかつた。

氣心知れぬ先輩を憚る心と、新進の技倆を惶るゝ不安の胸とは、茲に暫時の沈黙を醸した。煙草は絶えず煙りに縋れて居る。主人はやをら膝を進めて、

「何ですな……その、手前でもあまり熱が退けやせんので……年寄達が極く氣を揉むもんですから、今日小針先生にも御診察頂いたやうな譯でして……その何ですな、お見立てはどちらも同じものなんでせうか如何か、その處を一つ……」と頭を搔いて、

「御相談して頂きたいと思ひやして實は、お迎へ申上げたやうな譯なりました……はい」

「はゝあ……さうでしたか」

自分にも此言葉はあまりに白々しく響いた。が、小針醫學士は頓着せず、

「あゝ只今診察しましたがな、褥熱……ばかりでは無いやうに思はれるやうですが、蜂窩織炎の……つまりまあ熱と熱とが衝突したので恚んなに非常な發熱を來

したのでせう……随分非常な熱ですな！」

「えゝ弱ります、恚う續かれちやあ」

温度表を見て居た菊井ははつと此場合、弱いことを言つたと後悔した。同時に不安の念は見る／＼、嫉妬嫌惡の情を包んで、胸に廣がつた。

また一人、患者を奪はるゝ恐惶である。

町は三月程前に、花々しく故郷に開業した小針醫學士を歓迎した。同情した。日々の患者は、廻診時なる午後にも押しかけると云ふ。爲めに、今迄隆盛を擅にして居た郡立病院も、此頃滅切さびれて來たと云つて、人は益々小針醫院に集まつて行く。醫學士の稱號は町の人に、藥のきゝ目を信ぜられたので、尤も病院長としても學士であつたけれども。

兎に角、近村から此地に出て開業して、郡立病院以外に、可なり患者をあつかつて居た菊井は、此頃玄關に抜く下駄の數の少なくなつたと共に、病家の一二軒から、病人かつけの斷りを喰つたのであつた。

「ではそういうことにして……頓服は止して解熱剤は常藥にするやうに相談したから、藥はやはり菊井さんの方から……」

「は」

と主人は物足りなさそうな顔、菊井は凝乎と其横顔を見詰めて居た。

「兎に角明日また来て診ませう、では失敬します！」

如才の無い取り廻しを、面憎く思ひ乍ら、

「失禮します！」

何氣なく。

家内の者はそれとばかりに送て出る。車夫は待つて居て靴をはかせる。やがて二人曳きは勝ましく驅け出した。

障子の手かけに張り込めた萩の葉を、煙草をふかしながら眺めて居ると、主人はもとの座にかへつた。

「なか／＼如才がありませんなあ」

強ゐられた嘲りの笑は口許にのぼつた。

「はア、なか／＼もつて……」

主人は何とも返事が仕兼ねたらしい。後は咳にまぎらしてしまつた。

暫くまた話が杜絶えたが、菊井はやがて種々と看護上のことを注意して立ち上つた。

はかうとする時になつて、娘は慌てゝ靴を直した。雇ひ車の、さまで世話焼かずとも宜い理由があるのだから、車夫は店に寝そべつて居た。自分で手下げを持

つて、態と悠々と肩をあげて歩いたが、内心は非常に恥かしかつた。

人の世の戦ひの聲は街に騒々しい。亂れた頭腦は矢庭に興奮して、何處かにひそむ恐懼を勵ますやうに、

「戦はねばならぬ！」
と心に叫んだ。

車は受持ちの遊廓地さして走つて居る。

底本…「文章世界」明治四十年十二月

テキスト入力…小林 徹

公開…平成二十九年九月一日

底本改訂…令和七年七月二十五日

リンク…[水野仙子ホームページ](#)